

研究集会に参加して

藤 丸 昭

感謝をこめて

今年度国立国会図書館で開催された全国公共図書館参考事務研究集会への参加は、またとない勉強の機会であった。またとない勉強の機会であったというのは、ただ機会少ない東京へ出られたというだけではない。研究集会の2日目の終り頃と、3日目の終り頃に、栃木県立図書館の小林宏氏が、真摯に美しい声で述べてくれたが、会場を受け持ってくれた国会図書館の職員の皆さんが、まことに親切に応接してくださり、加えて、「全国の図書館の図書館」として、図書館の相互協力の実を身をもって示してくれる姿を、肌身にしみて知ったことであった。

わたしは昨、昭和45年9月28日から10月3日まで、文部省史料館で開催の「近世史料取扱者講習会」に参加し得たが、この折にも史料館の職員の皆さん、特に講師として直接指導にあたってくれた職員各位が、実に熱心に、そして謙虚に接してくれたことは、ややもすれば田舎天狗になりがちな中年者のわたしには有難い教育と反省の機会であった。

この時と同様に、今回の国立国会図書館の皆さんの態度には深い感銘を受けた。あらためて感謝せずにはすまされない気持である。また発表を受け持たれた何人かの皆さんの、地味ではあったが、真剣な態度にも深い感銘を受けた。発表のための発表でない実践の裏

づげが重みとなっているようであった。

以上のように、深い感謝の気持で一杯であるが、以下2、3点、討議その他の発言に感想とも意見とも述べてみたい。

図書館奉仕・相互協力の姿勢ということ

2日目であった。東京都内の各氏から図書館奉仕ないし相互協力の姿勢ということについての発言があった。ご発言の中で、墨田区立あずま図書館の千葉治氏は、住民の要求による奉仕ということを強調され、住民の希望によって資料を購入されていることと、その予算の消化が、約20万円(年間)ということであった。また参考図書類の1日貸出、加えて貸出の予約制度の確立を主張された。

都立日比谷図書館の北村泰子氏は、貸出の予約ということ、国立国会図書館への希望を述べられた。わたしはこの2氏のご意見はまさに当然と思いつさらに次のごとくつけ加えたい。

わたしの職場である図書館は県立であるから、国立国会図書館と市町村の図書館との中間に存在する。また県内だけでは、「図書館の図書館」としての立場になる。いうなれば複雑な思いで図書館奉仕に取り組んでいる。このことは、日比谷図書館も同様であろうが、中間の立場での経験としていえることは、各立場の図書館がそれぞれに責任を果たさなくてはならないということである。各館が責任を果たすことによって相互協力の網は美しくからみ合うのであるが、これが必ずしも地方の図書館の実状ではそううまくいっているとはいえない。あくまでも相互協力が必要なものであって、一方要求的協力関係は否定しなくてはならない。このことは、青森県立図書館の三上強二氏が発表の時、県立図書館から市町村の図書館に資料の貸出を実施すると同時に、各市町村の図書館に基本図書の備えつけなどを希望して、各図書館の設置充

実のために努力しているといわれたのは、わたしは、地方の現状を知るものとして賛成であった。

したがって、図書費の皆無に近い図書館が存在し、県立図書館がいつまでも図書資料をかなり大量に貸出すなどといった事例はほめたものではない。県立図書館なるがために、各市町村図書館は県立図書館の資料を借用する権利がある、と県立図書館へ要求する姿は、国立図書館があれば県立も市立も、そんな図書館は必要ないというにも近い意見でなからうか。

図書館の相互協力ということは、お互いの図書館が甘え合うことではない。むしろ逆にきびしく自己の立場で努力し、きびしい努力でなお補充できない時、他の館へ協力を依頼することである。またいえることは、図書館の相互協力は、自己を知ることである。何でも自館で住民の要求に完全に奉仕できなくてはと考えることの不可能さを早く知ることでもある。このことは蔵書構成ないし資料収集の相互調整ということでもある。図書館の相互協力は、小さい範囲から始めなくてはならないことも明記すべきことで、その最短の単位は、自館の各課各係の職員の相互協力である。自己反省としていうのだが、これが一番むずかしいのでなからうか。

貸出の予約ということ

墨田区立あずま図書館の千葉治氏は最終3日目の総括討議の時、貸出の予約制の確立ということについて、「貸出の予約を確実にすることなしに参考奉仕といったことは考えられない。利用の予約ということは、会場を使用したいときに予約をとるのに等しい。住民の当然の権利要求でなからうか」といわれた。わたしは、このご発言にあえて異をとねえ積りはないが、助言者である先生が、

「期間の長い予約はともかくとして、予約には必ずべきであろう。予約中の図書が、他から希望があれば日なり時間を限って利用してもらい、予約の多い図書は、複本として備えつける」といったご指導であった。

2日目の終り頃「予約は原則として実施しない」と発言したのはわたしであった。わたしが予約は原則として受けつけないという図書と、助言者や千葉治氏の発言の図書と、図書と表現しながら、実は異質の図書であることを、3日目の総括討議の時に知ったのであった。

わたしが例にした「都内に在住する学生などからの予約図書」というものは、おおよそ複本で購入できる性質のものでない。仮に複本で購入できてもそれは古書店の手をわずらわさなくてはならないもので、軽く「複本として備えつけては」といった助言者のお言葉をわたしはさみしく受けとめた。もちろんゼロックスかその他の方法で複写して複本とする方法がないわけではないが、地方で明治期大正期に出版した文献は印刷はよくなく、用紙や製本が特に悪くて、そうかんたんに複写によって複本とすることもできないのである。

こうした書物を一部の者に独占さすにも等しい予約制をとるのが真の図書館奉仕か、それとも来館順に利用していただくのがよいのか、わたしは予約制の確立ということについては、今しばらく考えつけてみたい。

相互協力はむづかしい

辛くかつお恥しい話だが、今度の研究集会のために、会場受持館の国立国会図書館が全国の府県立図書館（1部市立図書館も含む）を対象に実施した調査（①県立図書館の地方公共団体刊行物収集の現状調査 ②国立国会図書館蔵書目録等所蔵調査 ③国会議員等の伝記の調査）に未回答の館の1つは私の図書館であった。

今度の研究集会が図書館の相互協力ということであり、そうでなくても当然に速かに回答すべきものであるにもかかわらず、こうした調査にすら期日までに回答できないことでは、いくら言葉として図書館の充実を語り、図書館の相互協力を話し合っても実効のあがるものではなからう。わたしの図書館の誰が忘れていたのか、そのことはさておき、全くわたしに関係ないとはいえないものである。たえずこのようなことにならないようなムードを作っておかなくてはならなかった、と反省するのである。懇親会の席で調査について、重ねて依頼を受けたとき、辛く恥しい思いが全身にかけめぐるのが覚えた。それと同時に、国立国会図書館の職員の皆さんの仕事への熱意というものを知らされた思いであった。

最初にも書いたように今度の研究集会に参加して多くのものを学んだ。ただただ感謝するのみである。そして少しでも図書館と図書館奉仕を前進させるために精進したいと思っている。

（ふじまる・あきら：徳島県立図書館）